

## 終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究

— 保育所を中心に —

*An Empirical Study on the Early Childhood Education and Care  
before and after the End of World War II*

— Focuses on Nursery Schools —

豊田 和子 *Kazuko Toyoda*

(人間発達学部)

清原 みさ子 *Misako Kiyohara*

(人間発達研究所客員研究員)

寺部 直子 *Naoko Terabe*

(人間発達研究所客員研究員)

榊原 菜々枝 *Nanae Sakakibara*

(名古屋文化学園保育専門学校)

### はじめに

本紀要第39巻では「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究—幼稚園を中心に—」として、7園の事例をとりあげて「行事」「保育内容」「研究・研修」「保育者の思い」「その他」に分けて、日誌を中心に分析した。本稿では、保育所をとりあげるが、残されていた保育日誌が少ないため、日誌の分析とともに記念誌、写真・アルバムにみられる保育の実際を明らかにする。本文中の園・所名は【 】で表記し、保育園・所は省略した。なお、本研究は平成27～29年度の科学研究費（基盤研究(C)15K04334）の助成を受けてとりくんだものである。

### 1. 保育日誌等みる保育

ここでとりあげる日誌等の記録は、【ぼっぼ園託児所】、【木屋瀬（本園）】、【木屋瀬（分園）】、【滝野愛児園】、【和光】のものである。保育所の概要と分析対象とした日誌の年度と期間については、表1の通りである。

これらの日誌をてがかりに敗戦前後の保育所の行事、保育内容、保育者の研修・研究、保育者の思い、そして、敗戦前については、空襲警報発令時の保育所の対応等戦争に関わる保育もみていく。

#### (1) 昭和10年代半ばから敗戦まで

行事については、【ぼっぼ園託児所】では、昭和14（1939）年には、運動会、15年1月1日には、「朝礼式 地蔵寺及び宮城遙拝」を行っていた。運動会にむけては「青空の遊戯」を練習していた。16年の海軍記念日には「講話」と「神柱神社に旗行列 英霊参拝」

表1 分析対象とした保育所の概要、日誌の年度と期間

当時の名称	所在地	設立年	日誌の年度と期間
①ぼっぼ園託児所	宮崎県都城市	昭和8（1933）年	昭和14年度（4月1日～2月5日） 昭和16年度（6月12日～3月28日）
②木屋瀬保育園（本園）	福岡県北九州市八幡西区	昭和16（1941）年	昭和19年度（4月10日～12月24日） 昭和20年度（4月12日～7月31日、 9月16日～3月20日） 昭和22年度（4月18日～12月20日）
③木屋瀬保育園（分園）	同上	昭和19（1944）年	昭和20年度（4月11日～8月1日）
④天理滝野愛児園南分園	兵庫県加東市	昭和19（1944）年	昭和19年度（9月1日～3月23日）
⑤和光保育園	埼玉県行田市	昭和17（1942）年	昭和23年度（6月1日～3月2日）

がされていた。

【滝野愛児園】は、昭和19年の9月に開園し、入園式を行っている。10月の秋季運動会は、本園と合同で開催された。11月3日の日誌には「明治節」と書いてあるが、儀式をしたという記述はなかった。大詔奉戴日については、12月8日と1月8日は、保育者の一人が欠席ということで神社参拝をみあわせ、訓話、黙祷を行い、3月には神社参拝をしている。12月23日には、「第二保育終了式」が挙行され、「園務委員」が出席している。閉式後は子どもたちにおやつのおまんじゅうが与えられた。1月1日は、10時より「拝賀式」が挙行されている。6日には「第三保育期初ノ式」、「春季大祭の式」が挙行され「お昼にお赤飯を二個づ、与へる。欠席者の家へは配る。園務委員の方三名出席」している。2月3日は、節分で「豆まき」をしている。「紀元節」には、本園より園長が来園して「挙式」している。3月には、園芸会を3日に本園で、6日に分園で開催している。10日には、登山にでかけ、「朝礼後暫くして出発 ちらちらと雪が降つて寒かつたが皆元気よく歌など唄つて行く 二時過ぎ帰園」している。17日には遠足があり、「社町佐保神社へお参り」し、「帰りは道を代へ渡しを舟に載つて一同元気で四時二〇分」に帰っている。23日には「修得式」が行われた。

【木屋瀬（本園）・（分園）】の行事をみていくと、昭和19年の本園の「入学式」の「式次」は「一、開式のコトバ 二、一同敬礼 三、東方遙拝 四、祈念 五、君が代奉唱 六、勅語奉読 七、町長挨拶 八、園長のコトバ 九、国民学校長挨拶 十、先生の紹介 十一、保護者挨拶 十二、園児呼名（名札、お菓子） 十三、園児登園注意 十四、一同敬礼 十五、閉式のコトバ」というものであった。20年の分園の入園式は、「町長代理」が列席し、「農業会からダルマの貯金ガメ百ヶ寄付あり、町長様宅より黒豆・大豆計二升あまり頂きそれを煎りダルマ1ヶと共に帰りのお土産として」子どもたちに渡していた。天長節は、本園では、19年に「天長節にはバナナを給す。園児の喜び一入なり」とあり、20年には、28日に「式の御稽古」をしており、29日には、園長代理の「勅語奉読、御講話」があった。分園では、本園から来た主任保姆が「天孫降臨より昭和に至るまでの御話

と『寶祐無窮の勅』を賜ひ萬世に動くこと無き我が帝国の基礎が確定した等のお話」をしたとあった。遠足は、19年5月に、本園が「楠橋田代家菩提堂」にでかけている。

保育内容は、「遊戯」「唱歌」に関しては、【ぼっぼ園託児所】では、昭和14年度には、「愛国行進曲」「お山にめばえた」「兵隊さん有難う」「青空行進曲」「かたつむりの歌」「国民奉祝歌」「ハトポツポのおうち」という題がみられ、16年度には、「お日様キラキラ」「数え遊び」「国民進軍歌」があった。【滝野愛児園】では、唱歌の題として「お手々をたたけ」というのがあり、「運動会のお稽古」として、ラジオ体操、行進の他に、「幼稚園」という「競争遊戯」をして「男児の方にも女児の帽子をかぶらし仲々面白い」とあった。運動会では「銃後の少国民」という遊戯をした。また、3月の「園芸会」にむけて「お遊戯の練習」とあるが、題は書かれていなかった。【木屋瀬（分園）】では、19年度に「僕等の兵隊さん」「ニツ」「金太郎の唄」「父さんに母さんに」「猿蟹合戦」「仲良し戦友」「進めみ国の子供」「まんまるお月さん」「ウサギの歌」「僕は軍人」「おこりん坊」という題がみられた。【木屋瀬（本園）】では、19年度には、「ボクラのトナリグミ」「雁と燕」「赤ちゃん」「おやすみなさい」「オコリン坊」「玉入れ」、20年度の7月までは、「サルカニ合戦」「僕は軍人大好きだ」「ふたあつ」「春の小川」「まんまるお月さん」「進めみ国の子供」「空襲警報」「時計の歌」「仲良し戦友」「朝の路」「ニコニコ保育園」「うさぎ」「うさぎのお目目」「ヒコーキ」「小サイ母サン」「僕等の兵隊さん」「カゴメ」「送りませう兵隊さん」という題が記録されていた。どこの園でも「愛国」「兵隊」「軍人」等の言葉の入った戦争に関連する題がみられる一方、「かたつむり」「うさぎ」「春の小川」「月」等子どもにとって身近な虫や動物、自然の事象に関する歌や、「金太郎」「サルカニ合戦」等の昔話に関する歌や遊戯の題も多くみられた。

「談話」の紙芝居では、【ぼっぼ園託児所】の昭和16年度で、「桃太郎」「ウグイスの子宝歌」「親鸞様」、【滝野愛児園】で、「かくれんぼ」「お山のお友達 三ちゃんの巻」「待ちぼうけ」「猿とかに」「お山の鬼」「仔猫とトンボ」「落下傘部隊」「仲よし防空壕」、【木屋瀬（分園）】で、「小熊の冒険」「金の魚」、【木屋瀬（本園）】で、「サルとカニ」「仲良し五人組」「三匹の子豚」「ピヨンさんのおつかひ」「お山の隣組」「コグマのボーケン」「チビ公物語」「花咲爺さん」「落下傘」「桃太郎」「お猿の恩かへし」、という題がみられた。唱歌、遊戯と同様に、「落下傘」「防空壕」という戦争に関する言葉が入っている題もみられるが、そうでないものが多かった。

「手技」では、この時期には、どの園も折紙の題が比較的多くあげられていた。【ぼっぼ園託児所】では、昭和14年度には、「かぶと」「花」「やつこさん」「飛行機」という題がみられ、16年度には、「手技」「手工」と書かれていて折紙と推定されるものとして「カブト」「飛行機」「コツプ」「ハト」「フクスケ」「カラス」などがあった。【滝野愛児園】では「お船」があった。【木屋瀬（本園）】では、19年度に「週報ノ紙」を利用して「舟」を折ったとあり、20年の7月末までには、「カブト」「山」「舟」「金魚」という題がみら

れた。【木屋瀬 (分園)】では、色紙で「兜」、紙で頭にかぶれるような「大きな兜」を折ったり、「風車」「舟」を折ったりしていた。折紙以外では、【ぼっぼ園託児所】で、14年に「ぬり絵やはりつけ」、【木屋瀬 (本園)】で、20年に「紙ぐさり」の室内飾り、鯉のぼりや花のぬり絵、花菖蒲のぼり紙をしていた。【滝野愛児園】では、自由画がとりあげられていた。【ぼっぼ園託児所】では、「ぬり絵やはりつけなどをして大喜び いちようもみち松葉など色とりどりのはりつけ めづらしがつた」(15年2月5日)、「手工にコップをつくらせるととても喜んだ」(16年5月15日)とあり、【滝野愛児園】では、「はじめて自由画を描く。思ひつきがゆも面白い」(19年10月13日)と子どもたちの様子が記されていた。【木屋瀬 (本園)】では、金魚を折った時に「大きい尾ひれの特に目立つて出来上つて台の上に皆並べてうれしそうだ。お父ちゃんに送るからもつてかへしてと頼む子供も居た」(20年7月18日)、【木屋瀬 (分園)】で兜を折った時に「お家へ持て帰りたい様子だが、菖蒲の節句鯉幟も男の子に因んだ物を少しづつ、かざつてやりたいと一寸心ばかりのはからみで一度あづかつて室の装飾をなす」(20年5月18日)とあった。

「観察」については、【木屋瀬 (本園)】の20年度に入ってからの日誌に若干記述がみられる程度である。オタマジャクシをバケツに入れて出して置いたり、畑の麦と裸麦を一茎ずつ置いておいたりして、子どもたちが観察できるような方法がとられていた。「天満宮様に参り麦刈と花菖蒲をよく見せてつれ帰る」(6月12日)こともあった。【滝野愛児園】では、朝顔の観察をしていた。

「自由遊び」の時間についての記述は多かった。【ぼっぼ園託児所】では、滑り台、ブランコ、鉄棒、砂遊び、積木、ボール投げ、鬼ごっこ等をしていた。「子供は遊び道具がないと仲良く遊ばない。すぐけんかを始める」が、積み木を「製作所から分けて戴き」、喜んで遊んでいると記されていた(16年6月3日)。【滝野愛児園】では、「道具が整つてゐないので自由あそびにはすぐあきる様である」(19年11月2日)とあった。【木屋瀬 (本園)】では、滑り台、舟形ブランコ、絵本、棒登り、積木があげられていた。【木屋瀬 (分園)】では砂遊びや水遊びも記述されていた。【滝野愛児園】【木屋瀬 (本園)】では、園外保育で神社等へ出かけ、そこでお弁当を食べて自由遊びをしたという記述が頻繁にみられた。

朝礼の際、【ぼっぼ園託児所】、【木屋瀬 (本園)】では宮城遥拝が行われていた。ラジオ体操は、戦前には、どの園でも朝礼や運動会で行われていた。【滝野愛児園】では、朝礼で「銃剣術のお稽古」をして、園児が喜んでしていたとあった(19年9月26日)。

子どもたちの食事やおやつ、暖房について苦慮していることが見受けられた。【木屋瀬 (本園)】、【滝野愛児園】では3時におやつを食べていた。おやつは、おみや豆が主であったが、【滝野愛児園】では、お団子やおまんじゅうのこともあった。【木屋瀬 (本園)】でも、園児の家から貰ったグミや団子をおやつにすることがあった。両園ともお弁当持参だったが、【木屋瀬 (本園)】では、煮豆やおみおつけを作って食べさせていたこともあつ

た。【木屋瀬（分園）】も弁当持参で、おかずの少ない子がいるので「あまり可哀想と思ひ今日胡麻と塩イリコ摺りつぶしびんに詰めて子供に備へる」（19年6月26日）ことをしている。【滝野愛児園】では、「今日よりお弁当暖めてやる。暖いお弁当を眺めてうれしさう」（20年1月8日）とあり、その後、お弁当が暖かくておいしいと喜んでいて、そのためか出席もよいと記述されていた。この園では、冬場には、特に朝は寒いので、子どもたちとともに拾ってきた松ぼっくりをたいたり、保護者が持って来てくれた薪をたいたりして、暖めていた。薪が欠乏して心細かった時に「心細いと思つていたのに方々から沢山戴いたので度々炊いてやる事が出来る」（20年1月27日）とあり、その後「火鉢が来て皆大喜び」（2月20日）とあった。

保育者の研修・研究については、【木屋瀬（本園）】で、昭和19年9月4日に三市四郡の視察研究会が開催され「歴史的な行事であったのだから、園史の記録として最大漏らさず記して置かねばならぬ」と記録されていた。午前中に保育を参観し、午後から研究会となっていた。これは北九州保育会で行われた研究会の形式を踏襲していると思われる。県関係者、市郡地方事務所関係者、保育所関係者などが47名あまり集った。午後の部では保育への批評や感想が出された。【滝野愛児園】では本園と分園の交換保育や研究会が行われていた。他園を見学し、学校の参観も行っていた。

保育者の思いについては、保育内容に関するものも多くあったが、戦争に関わって【木屋瀬（分園）】では「自分があゝ一時も早く立派な子供を育て父様や兄様方の仇を討たせてやりたい無心な子供の顔 見る度に立派な兵隊になつてお国の為に働く様な子になつてくれとお祈り致します」（20年4月18日）、【木屋瀬（本園）】では「日本の一大事の時を背負つて雄々しく進む人になつてください」（5月16日）と子どもたちに期待する記述や、警報が続き可哀想という記述もみられた。

戦争にかかわっては、昭和14年の【ぼっほ園託児所】では、園児たちが遺骨の出迎えをしている。【滝野愛児園】では神戸から疎開してきた子どもを受け入れている。【木屋瀬（本園）】では、園長の出征、園児の兄、親、叔父などの出征の見送りに園児がでかけたなり、戦勝記念の旗行列を行ったりしていた。

また、幼稚園の事例と同様、昭和19、20年は、保育所も空襲の影響を受けていた。保育中に警報が発令された場合は、園児を家に帰らせていた。家の者が迎えに来る場合もあったが、保姆たちが手分けをして子どもたちを家まで送り届けることもあった。【滝野愛児園】では「近所の子供を先に送り後駅前の子供達を送つて行く」（20年2月23日）こともあった。【木屋瀬（本園）】では、19年の6月に園庭に防空壕をつくり、退避訓練もしていたが、実際に警報がでた際には、子どもを町別にさらべて迎えが来た順に帰していた。始業前で園児が少数の場合は保姆が手分けして送りどけることもあった。警報がでて子どもたちを帰宅させても、5月初旬以降は、午前中に警報が解除になると、保姆が手分けして家に迎えにいたり、帰宅させる際に解除になったら直ぐに登園するように言い

渡したりする日もあった。このようにして、園児が再び登園して保育を開始することも多くなっていた。7月に入ると、警報が鳴っても「大型機一機」という情報では保育を続けた。また、夜中や早朝の警報で幼児が睡眠不足で保育中に居眠りをすることも多くあった（20年7月2日、5日）。7月末には、本園と分園の保姆が協議して休園することを決定した。

さらに、空襲以外でも戦争が保育に影響を及ぼしていたことがわかる記述もあった。【木屋瀬（分園）】は、「陣地」の近くにあり、保姆が「陣地奉仕」に出かけたばかりでなく、兵士の夕食の豆ご飯の為、幼児に豆のさやむきを依頼されていた。「豆むきも間接には御奉公になるだろうがこう毎日もらってこれてはいささかお稽古のさまたげになりはせぬかと案じられる」（20年6月11日）と懸念していた。

## （2）戦後20年代半ばまで

行事については、昭和20年度の【木屋瀬（本園）】の終了式の次第は、「1. 一同敬礼 2. 終了生呼名 3. 保育証、賞状、賞品授与 4. 訓辞 5. 町長・後援会長祝辞 6. 保護者挨拶 7. 終了生の言葉（男児と女児一名ずつ） 8. 在園生の言葉 9. お別の歌 10. 一同敬礼」とあり、遥拝や勅語奉読などはみられない。22年の【木屋瀬（本園）】の入園式の式次第は「一、集会一同教禮 二、開式ノ辞 三、君ヶ代 四、園長挨拶、保姆紹介 五、町長挨拶 六、来賓 後援会長、保護者挨拶 七、新入園児氏名呼名 八、諸注意及名札、オハツ 九、一同敬禮 十、閉式解散」とあり、戦前にあった「東方遥拝」や「勅語奉読」などはなくなっているが、「君ヶ代」は残っていた。21年の2月には、紀元節の式は行われており、主任保姆が「神様のお話」をしている。22年度は12月までの記述しか残されていないので、この年度に紀元節の式が行われたかどうかは不明である。22年4月29日の日誌はあるが、天長節に関する記述はなかった。遠足については、【木屋瀬（本園）】では、20年9月17日に保育再開してからまもなく「兵隊さん」のいる「陣地」へ徒歩で遠足にでかけている。22年5月に遠足の予定はあったが、雨のため中止になっている。【和光】では、23年10月に遠足が行われた。運動会は、【木屋瀬（本園）】では、昭和20年11月には天神様の境内で運動会を開催し、22年には、9月に小学校と合同で秋季運動会を開催し、10月には中学校の運動会に参加している。【和光】は、10月に運動会の練習をしていた。遊戯会等については、21年3月に開催された【木屋瀬（本園）】の「遊戯会」には、会場にした寺の本堂の床が抜けるほど多くの地域の人々が集まった。【和光】では、24年2月に「学芸会」を開催している。季節の行事は、22年の【木屋瀬（本園）】で、「七夕様」がされていた。

保育内容は、「遊戯」「唱歌」に関しては、戦争に関する題はみられなくなる。昭和20年9月以降、【木屋瀬（本園）】で記述されていた題は、「指の家族」「ネズミの隣組」「春の小川」「お猿とらっきょう」「お米の歌」「稲刈りの歌」「舌切雀」「ヨイオヘンジハイ」

「冬の歌」「ナカヨシ」「お母さんのお使いの歌」「落葉の子供」「支那言葉の歌」「うぐいすの歌」「春のお使いの歌」「母様ありがとう」「オコリン坊」「フタツ」「カカシとカラスの歌」「サルカニ合戦」「アメリカ言葉・おやすみなさい」「お別れの歌」「ベタコ」等であった。23年の【和光】では、「だるまさん」「とんがり帽子」「仲良し小道」「赤い靴」「シャボン玉」「兎と亀」「私の人形」「雨だれぼったん」「汽車」「お早う」という題が多くとりあげられていた。

「談話」の紙芝居では、【木屋瀬（本園）】では、20年度9月以降は、「おやまの隣組」「コザルの恩返し」「三匹の子豚」「カミサマト白ウサギ」「仔熊のぼうけん」「チビ公物語」「ピョンチャンのお使」「雀のお宿」「おさるのしくじり」、22年度は、「三ビキの小豚」「チビ公物語」「小猿の恩返し」という題がみられ、戦争に関する言葉の入ったものはとりあげられていなかった。【和光】では、40を超える題が記されていた。子どもたちがせがむのでやったという記述もあり、子どもが好んでいたことがわかる。「金太郎」「サルトカニ」「丘の上の地蔵さん」「七匹の子山羊」「ヒヨコの友達誰と誰」「森の運動会」「月の中の兎」（6回以上）、「赤いまり」「お山のとなり組」「七匹の子羊」「おむすびころりん」「ドガン」「チビ公物語」「お猿の曲芸」「泣いた赤鬼」（5回）と、多くの種類をとりかえながらやって見せていることがわかる。それでも紙芝居が少なく、登場人物を変えたり、セリフを変えたりして見せたことが記されている。

「手技」の折紙では、【木屋瀬（本園）】では、昭和20年9月以降には、「ふくら雀」「舟」「フウセン」「風車」「カブト」「ハカマ」「ヤッコ」「帆カケ舟」「ニソウ舟」「ウサギ」がつくられていた。戦前と同様に子どもたちが作ったものを室内の飾りにしたり、手に持たせて歌ったりしていた。22年には、古い絵本や新聞、ハガキを利用して、折紙や貼り絵をしていた。【和光】では、折紙は午後によく行われていた。「奴さん」「ナガカブト」「お角力さん」「金魚」「にそう船」「ボート」「お花」「うさぎ」「ブタ」「だるまさん」等、たくさんとりあげられていたが、夏休みまでは、子どもが出来なくて泣いて困ることもあった。11月以降には、「ベット」「たぬき」「ライオン」「すゞめ」「つばめ」「たこ」等がとり上げられていた。他に「ぬりゑ」も後半には時々行われていた。「見取画」「図画」「張紙」もあった。子どもの発案で製作することもあった。用具が足りなくて、なんとかしてクレヨン、ハサミを用意したいという記述も見られた（23年6月22日）。

「観察」は、【木屋瀬（本園）】では、昭和22年には、「メダカ」「鯉のぼり」「雀」の歌にちなんで、メダカ、鯉、鯉のぼり、雀を観察させたり、園外保育の際「遠賀川べり」で「各種の花の名を教」えたりしていた。「まっすぐなものと曲がったもの」を観察させることもあった。【和光】では「植物の指導」と記されていた（23年9月15日）。

自由遊びは、【木屋瀬（本園）】では、20年には、外でブランコ、滑り台、鉄棒で遊んだり、室内で積木やままごと、相撲、鬼ごっこをしたり、保姆と共に「猫ねずみ」をしたなど、多く記述があったが、22年には、「船頭さんの自由遊び」（5月2日）「自由遊びの

ときに習ったお唱歌を歌って楽しく遊ぶ」（11月27日）という記述以外は「自由遊び」とあるだけで具体的な遊びの内容は書かれていないことが多かった。【和光】でも同様であった。

朝礼等では、戦後になっても、【木屋瀬（本園）】の、「朝の行事」で「遥拝」が行われていた。21年になって園長代理から注意され「回れ右をやめ遥拝の時も『今日も仲良く元気で立派な日本人になります』をやめ『今日も仲良く元気でよい子供になります』と言わせる」（21年1月30日）ようになった。

保育者の研修・研究については、【木屋瀬（本園）】の22年度には、民生部長の視察や地方事務所、町村の社会係の見学があった。

保育者の思いに関しては、【木屋瀬（本園）】では、保母が「敗戦国の悲哀何かのはしばしに忘れやうとしても忘れる事は出来ない」（20年12月13日）と敗戦を悔しいと思う気持ち、「どの先生もどの先生も今日は子供の真心に打たれて、保育の愉しさを愉しみつくしてゐられる様な面もち」（20年9月17日）と、戦後の保育の再開を子どもと共に待ち望んできたこと、再開にあたっては楽しい保育をしたいという思いが述べられている。【和光】では「日誌をつけるやうになつて私達は非常に保育に対し向上したやうに思います」（23年6月18日）と日誌をつけることで指導に向上がみられると保母の思いが綴られていた。

## 2. 記念誌にみる保育

ここでとりあげたのは、北は岩手県、南は鹿児島県までの19ヵ所で、所在地は註の後に〔 〕で記した。

### (1) 昭和10年代半ばから敗戦まで

昭和16（1941）年に国民学校が発足するが、幼稚園は国民幼稚園とはならなかった。だが、今回の資料から、長野県では、17年に飯山の【めぐみ】が飯山国民保育園<sup>1)</sup>に、大正15年設立の上田の【甘露園】が中央国民保育園に名称変更していたことがわかった。【甘露園】は、上田明照会によるもので、後から授産所も併設された<sup>2)</sup>。大阪の博愛社も、博愛幼稚園と昼間託児所があり、昼間託児所は、母子保護事業の一環であった<sup>3)</sup>。

第二次世界大戦がはじまり、戦争がはげしくなってくると、その影響が表れてくる。

昭和18年創立の【徳田】は、「時局の要請にもとづくものであり、働く母親たちのための戦時託児所として造られたものであった」<sup>4)</sup>という。設立母体のベタニア事業協会は、一切の外来語を排斥する思想統制の中で、慈生会と名称を変え、フロジャク神父のもとで、活動を継続している。【岡山博愛会】では、18年12月から主任保母が「軍事援護訪問婦として、軍事援護事業に専任し、旭東地区担当の出征軍人遺家族の家庭を巡回訪問して奉仕する新任務」についている。19年の非常時の下でも、保育日数290日、在籍平均数64名、20年に入り、「警戒警報、空襲警報の下にも保育園は休まなかった」が、6月29日の



岡山空襲で焼失している<sup>5)</sup>。

【信愛】では、財団法人設立に当たって「戦時下において『キリスト教主義』を掲げる  
ことについては、様々な困難がありましたが、本園にとって曲げることの出来ない基本理  
念である旨の厚生大臣宛嘆願書を提出して、ようやく認可を得ることができ」たのは19  
年であったという<sup>6)</sup>。

戦争末期になってくると、運営に様々な困難を抱えるようになる。町婦女会員の奉仕で  
副食給食、乳児部設置を行ってきた【伏木】では、「約2万の部隊が駐留し、港湾の全て  
は軍の指揮下におかれ、婦女会員は勤労奉仕に出かけて託児所を省みる暇は」なく、企業  
からの奨助金も途絶え、子どもに与える食料も思うように手に入らない中で、所長は閉鎖  
を考えたという。しかし、朝になると次々と乳幼児を連れてくる母親を見ると「心を奮い  
起こして、明日の保育を思」い、「苦しい経営は所長の私財を投じて続けられた」という<sup>7)</sup>。

【聖母園】では、「昭和20年戦争たけなわの頃には、近所の心ない一部の方々から外国  
の宗教、十字架が爆撃の目印になるとかいわれ、石を投げられ、いたずらをされた」とい  
う。関門地方もアメリカ軍の空襲が再三あり、B29の来襲が頻繁になり、「毎日の保育も、  
防空ごうへの待避又解除のくりかえしで、落着いた保育も十分でき」なかったという<sup>8)</sup>。

こうした状況下で、保育を経験した当時の園児の思い出としては、発表会のような行  
事、楽しかった遊びやおやつに関することが比較的多く語られている。

【梅壇】(当時、幼稚園)の『60年のあゆみ』には、卒園生の思い出がたくさん紹介さ  
れていて、15年の卒園生は「裏山には笹が繁っていて、その廻りは駆けっこをするのに、  
ちょうどよい程度のトラックになっていた。ここを一生懸命走り遊んだものだ。ドングリ  
だって沢山あった」という。また、花まつりで甘茶をかけてお祈りしたことや遊戯もした  
ことを思い出として記している<sup>9)</sup>。

【久慈】の第2回卒園児(15年3月)は、先生が笑顔で「一人一人の名を呼んで迎えて  
くれた」こと、ガキ大将で、先生に「木魚みたいにいつもポカポカやられていた」こと、  
「お昼寝は又楽しい一時で、大きなフトンであったろうか、皆んな足を入れて大きな輪に  
なって、ワイワイさわぎながら寝たもので、おきてからは又又ウレシイおやつの時間でラ  
クガン、饅頭の四半分、特別うまかった」ことを「遠い思い出」として記している<sup>10)</sup>。

【瀬戸桜】に15年前後に通園していた人は、「毎朝朝礼があり、通園の様子を誉めても  
らってとても嬉しかった」ことや、発表会で2年以上通園した園児が着られる和服を、1  
年だけだったが「先生が特別に着物を着せてくれて嬉しかった」こと、3～4年通園した  
園児は、踊りが「とても上手だったのを覚えて」といと記している<sup>11)</sup>。15年頃の卒園生  
は、「当時、幼稚園には行くものと思っていた」という。「ブランコや滑り台、砂場などの  
遊び場が」あり、「保護者による送迎は」なく、「地元の農家の子どもたちが集団で登下園  
していた」<sup>12)</sup>。

【つぼみ】の17年の卒園生は、「『大きくなったらあの軍人さんのような立派な人になり

なさい』それは卒園式の日、園長先生の隣に座っていた立派なヒゲをたくわえた大将の姿を見て母が言ったことばでした。僕も大きくなったらあのようなヒゲを伸ばした軍人になろうと小さい胸に淡い希望を持った時を思い出します」と綴っている<sup>13)</sup>。

【川内隣保館】の17年の卒園生は、「太平座でのお遊戯発表会」の記憶を記しているが<sup>14)</sup>、会場を借りての行事がまだ行えたことがわかる。

【梅檀】の17年の卒園生は、「赤ちゃんを見に行っては園長先生に叱られ、逃げて帰ったこと」「遊具は、すべり台、ブランコ、遊動円木くらい」であったが園の西にある白山社の前の笹山で、「竹の子を取ったり、笹の中を走り廻ったり」したことをはじめ、楽しかった思い出が数多くあるという<sup>15)</sup>。18年の卒園生は、「16人という少人数」で、「広い教室で先生やみんなと輪になって、うたったり、踊ったりしたことがなつかし」という<sup>16)</sup>。

【若葉】の園長は、15年から18年3月まで通園していた。一階のオープンフロアで数十人の縦割り合同保育で、「遊戯をしたり、歌を歌ったりして」いて、「先生方のしつけは厳しく怒られるのではなく、よく叱られ」た。「わーたしは良い子」と始まる歌や、帰には「これでおしまーい」で始まる歌も歌っていた。弁当を持って「遠くから徒歩で、自転車の荷掛けに乗って、また、リヤカーに近所の通園児が乗り合わせて」通園していた<sup>17)</sup>。

19年以降の卒園生になると、戦争の影響が少しずつ大きくなり、20年になると食料をはじめ物不足に関する思い出も記されるようになるが、地域により、園により異なっていた。

【梅檀】の19年の卒園生は、「先生のオルガンをかこんで歌や遊戯を教えてもらい、時には絵や折紙もし」たことや、昼食の時に、両手を合わせてお祈りをしてから食事したこと、花まつりで甘茶をかけてお祈りしたことを記している。可愛い赤ちゃんがいて、「乳母車に乗せて遊んだり」して「ほんとうの妹みたい」だったという<sup>18)</sup>。

【南町】の19年の卒園生は、「当時の園は長い平屋で、紙芝居を見たりお弁当を食べたりした机と椅子のあった部屋、丸くて太い梁に作られたブランコのあった部屋、お昼寝をした畳の部屋」があり、後から建物が作られ「大きなお遊戯室と2つの部屋、そして滑り台も増え、みんな元気で大声で歌い、楽しく踊り、遊びまわる毎日」であったという。大きな藤棚の下の「ブランコと砂場も大好きな場所で、昼寝から抜け出しては遊びに夢中になり、先生に怒られたのも思い出の一つ」と記している<sup>19)</sup>。

【川内隣保館】の19年の卒園生は「第二次世界大戦のまっただ中にあり物資不足の時代で、園児は下駄ばきか、素足で通っておりました。腕ぱく盛りの私は、何時もお山の大将でありましてみんなから『部隊長』とあだ名で呼ばれていたことを思い出」すという<sup>20)</sup>。

【こがね】へ18年9月から20年3月まで通った人は、「園舎は現在では考えもつかない杉皮葺きの屋根で出来ており大きい掘ゴツツに紫色の布団をかけてあり」、第二次世界大戦中の「食料もないつらい苦しい時代」で、「和尚さん夫婦に作っていただいた麦粉だけのふかし饅頭を分け合って食べたことが懐かしく思い出され」という<sup>21)</sup>。

当時の保育者は、どのようなことを回顧しているのでしょうか。

14年から保育に携わった【白道】の元園長は、「保育室には足踏み式のオルガンが1台、黒板が1台」「イス20脚、机は10台」あったが「全員出席の日は、とてもたりなくて、小さい子たちは先生のそばに立っていたように思います」と述べている。また、「木造本堂の縁側に、園長手作りの木の滑り台」があり、子どもたちに人気があったが、縁側にあつたため高くて「危険だということで、庭におろされて、本堂前庭の砂場の横に移動されました」と記している。戦時中の子どもたちは「大きくなったら何になりたい」と聞くと、すぐに返ってくる答えは、「兵隊さん！看護婦さん！というもの」で「大声で予科練の歌、戦友の歌とか白百合の歌（看護婦さんの歌）なんかを歌ってあこがれて」いた。「17年の7月7日の七夕祭りに際しての園長代理としての挨拶に、大東亜戦争開戦後初めての事変記念日であるから、皇軍の兵士の無事を思い、兵隊さんに負けられないような丈夫な子供になるよう、お星様に約束しましょう…等々の話をしたことを覚えて」いるという。園児の服装は白いエプロンをつけ、着物の子もいたが、「戦局がひどくなってくると、靴など履いている子供はほとんどいなく、下駄かわら草履」で「ハダシの子も多くい」るようになる。「戦時中だからこそ、朝のお参り、帰宅時の仏様への挨拶、今と同じ恩徳讃等の佛教讃歌を歌い続けました。子供達も喜んで、なじんで歌いました。先生のいうことを聞かないやんちゃは仏間に入れてご本尊様と対面、このことは、卒園して60年の今も、当時の暴れん坊達が折に触れて、懐かしがって」いると綴っている<sup>22)</sup>。

15年から【めぐみ】で保姆をしていた人は、「お帰りの歌」の歌詞が土曜日だけは違って「『あしたは嬉しい日曜日』と歌うところで、子どもたちはそこだけ声を張り上げてましてね。あしたは一日おうちに居られるというのが、その頃の子どもたちにとってもどんなにうれしかったか。それが今一番に思い出され」と、綴っている<sup>23)</sup>。【めぐみ】では、18年頃から遠くの診療所に傷痍軍人を慰問するようになり、当時引率した保姆は「“白衣の兵隊さんありがとう”の歌をうたって遊戯したところ、兵隊さんに泣かれ、ついこちらみんなが貰い泣き」したと述懐していることが紹介されている<sup>24)</sup>。

【久慈】に17年から在職した人は、「園児と薪や、たきつけ拾いをし、背に負わせて歌をうたいながら山を上り下りした日々で」あったという<sup>25)</sup>。

【聖母園】では、物資不足で保育教材も十分になく、「印刷所より雑紙をいただき、ブックを作ったり、建築現場の木片を集め、動物の乗物を考案したりしました。浜辺への園外保育で、まさごや貝がらをひろい、空缶を利用してのリズム楽器づくり、竹を割ってのカスタネットづくり等まわりに点在する、あらゆる廃材、素材を利用し、自給自足をして」いた。「食物も十分になく、すべて配給制」で、「闇市・闇売りであがったお菓子などを警察署より園児のおやつとして、とどけていただいた」こともあったと、記している<sup>26)</sup>。

## （2）戦後20年代半ばまで

戦火を免れ、保育を継続していた保育所も多いが、戦争末期には休園したところや、地域によっては空襲で園舎を焼失したところは、その再建が大変であった。

【双葉の園】は、19年3月の第13回卒業式をもって事業を中止していたが、20年5月に戦火により焼失している。20年10月には「鳥海部隊長にお願いして」、12月には「焼け残りの馬小屋その他数棟の建物と土地五千余坪を大蔵省より借受け直ちに修理修復して」「未亡人母子、引揚母子、戦災母子の為め母子寮、授産場、保育所を再開」している<sup>27)</sup>。園舎は残っていても、休園中に避難所に使われていた【つぼみ】に21年4月から24年11月まで在職した人は、「戦時中つぼみ保育園は多くの方の避難所に用いられていたそう」で、「とても汚れている入口、ホールを見て、皆さんが大変な生活をしていらしたことが判りました」「たまった泥をけずり取ったり、拭いたりする日々でした」「そして喜びの中に5月20日に再開入園式を迎え、園長先生はじめ入園児、お家の方と共に感激と感謝いっぱいになった」という<sup>28)</sup>。

空襲で焼けなかった保育所では、園舎や遊具はそのままで、保育が続けられた。こうした保育所に通った子どもたちでも、楽しかった遊びと共に敗戦当時の物不足の状況を思い出として語っている。

【南町】の23年の卒園生は、「全てにおいて物資不足の時代でした。制服など勿論なく、私は母の着物を手直ししてもらい着ておりました。園の建物は玄関正面に畳の部屋があり左手にホール、右手に教室と常番さん達の部屋があったような気がします。遊具は、すべり台やブランコ、積木等が主だったと思います」と、記している<sup>29)</sup>。24年3月の卒園生は、「何もわからず、ヤンチャでしたがお友達が皆さんやさしくして下さり仲よく遊んだ記憶があります。園内ではお遊戯をしたり、紙芝居を見せて頂いたり、先生のオルガンの伴奏に合わせて歌ったり、ほんとうに懐かしく思い出されます」と、述べている<sup>30)</sup>。

【梅檀】の23年の卒園生は、「裏山でよく相撲をしたり、中広場では砂山を作りトンネルを掘り、壊れた瓦を汽車にして電車ゴッコをして、よく遊んだことが一番印象に残っている」という<sup>31)</sup>。24年の卒園生は、「丸太のブランコの中央部にまたいで乗った」ところ、「最初のうちは小さく揺れ楽しかったが、だんだん大きく揺れだすと次第に恐くなって」きて、「必死になって丸太にしがみつくが」「とうとう丸太にそって落ちてしまった。そしてワッと泣き出した」思い出を、記している<sup>32)</sup>。25年の卒園生は、「“みどりのトンネル”のような小道」を通して「山門をくぐると」「園長先生の笑顔が」あり、「『おはよう』と呼びかけられた張りのある明るいひびきの声が、いまもなつかしい」こと、「園庭は本堂の南側に位置し、走り廻るには十分な広さであった。しかしそれよりも私は、本堂の北側の砂山に気が引かれていた。春には、付近の畑から飛んできてひとり生えた菜の花、夏には大きなありとあり地獄、秋にはドングリ、冬には、なぜか砂山の頂上にある小さな社が心に残っている」こと、「“雨が降ります 雨が降る”」をはじめ「心のふるさとともい

える数々の童謡を教わったのも、この園時代」であったことを述べている<sup>33)</sup>。

25年の【つぼみ】の卒園生は、「楽しく通った園への道の周りが田圃だった」という<sup>34)</sup>。

当時の保育者の回顧には、おやつにかかわることが記されていて、時代状況がうかがえる。

【神戸】（水笠保育所）で昭和18年から25年1月まで主任であった人は、「戦後の最も厳しい食糧難の時代、子どもに与えるおやつも十分でない状態で」「『遅くまで残る子どもがおやつなしでは可愛想だ』と、自分の配給分の大豆を炒って子ども達に与えながら、親が迎えに来るのを共に待った」という<sup>35)</sup>。

【久慈】に17年から24年に在職した人は、「戦後は午前保育で、おやつは（先代の）お寺の奥様が毎日もって来て下さいました。その当時は、ラクガン、マンジュウ、ダンゴ、果物少しづつわけ合せて食べさせました」「お釈迦様の日、白い大きなゾウの背に釈迦の御堂をのせて、園児や仏教婦人会、中町の青年、世話役の人々と町をお祭りのような盛大なお通り園児たちの歌と、婦人会の御詠歌と、一年に一度春お釈迦様と子供のたのしいお祭りでした。本堂でおゆうぎをした」と、記している<sup>36)</sup>。

### 3. 写真にみる保育

ここでは、保育日誌や記念誌等でとりあげた以外の8つの保育所から入手できた写真やアルバムを手掛かりに、戦前戦後の保育の実際について比較検討を行うことにする。各園名と所在地、設立年は以下の通りである。【神埼双葉園】（佐賀県神埼市、1928）、【安中】（群馬県安中市、1919）、【二条】（京都府京都市、1929）、【赤穂】（長野県駒ヶ根市、1927）、【春日井】（愛知県春日井市、1941）、【睦】（岩手県一関市、1926）、【松阪仏教愛護園】（三重県松阪市、1924）、【山ノ内】（京都府京都市、1942）。

全体的に、普段の保育写真よりも園行事の写真が多くあり、戦前戦後を通じて最も多かったのは、修了式の写真や、園児たちが整列して写っている集合写真だった。

戦前の修了式の様子は、【神埼双葉園】のように白いエプロン姿で写っている園や、【安



1944(昭和19)年3月 神埼双葉園



1946(昭和21)年3月 神埼双葉園

中】のように女の子が着物に草履履きという姿で写っている園などがあつた。戦後の集合写真では、【二条】や【神埼双葉園】のように、各自が私服姿で写っている園の他に、【春日井】のように複数の男の子が学生服姿で写っている園もあつた。

写真からわかる修了児の傾向は、【安中】では、戦争末期まで修了児が減少することはなかった。【神埼双葉園】では、戦争末期の19年に85人だったのが、21年には69人と若干減少している。【春日井】は、戦後の22年度には大幅に修了児が増え、150名を超えている。

行事の集合写真もあり、【二条】はお雛祭り、【赤穂】は七五三があつたことがわかる。



1950(昭和25)年3月 二条保育園



1951(昭和26)11月 〈七五三〉 赤穂保育園

次に運動会の写真では、戦前は、【睦】では園庭の中央で保姆がオルガンを弾いていてその周りを園児が輪になって遊戯をしている様子や、障害物競争で横に倒した梯子を潜り抜けて走る園児たちが写っていた。戦後の運動会写真では、【春日井】では広い運動場の中央に保姆が座ってその周りを大勢の園児が円形隊列になってしゃがんでいる様子や、【松阪仏教愛護園】のように白いエプロンをつけた園児が二人一組になって遊戯をしている様子が見える。



1941(昭和16)年9月 睦保育園



1948(昭和23)年 松阪仏教愛護園

また、遊戯会の写真では、戦前には、キリスト教の【睦】ではクリスマスの聖劇をしており、16名の園児が動物や星等のお面を被ったり白い布を頭から被り舞台の上で写っていた。昭和16年ごろの遊戯会と思われる【春日井】の写真には、日の丸の旗の前で、遊

戯をしている女兒が写っている。二人は和服を着ていて、衣装をつけて遊戯をすることが戦前も行われていたことがわかる。

戦後になると、【春日井】では、「ニャンニャン踊」という題目で、2名の女兒が着物に前掛けをし、白い布を頭に被り両手を開いてポーズをとっている写真や、「やさしいお母様」という題目で着物と帯で着飾った12名の女兒が演じていたものがあった。



1941(昭和16)年12月 睦保育園



1949(昭和24)年度 春日井保育園

それ以外に、戦前には、【二条】では園医が園児の背中に聴診器を当てている様子の写真があった。軍人援護会により設立された【山之内】では軍人を園児が整列して迎えている様子が写っていた。戦後になると、このような園医や軍人のような写真にはみあたらなかった。



1939(昭和14)年 二条保育園



1942(昭和17年)以降 山之内保育園

## おわりに

本稿では、戦前は【ぼっぼ園託児所】【木屋瀬（本園）】【木屋瀬（分園）】【滝野愛児園】の4ヵ所、戦後は【木屋瀬（本園）】【和光】の2ヵ所の保育日誌等の記録、および記念誌や写真から、戦前戦後の保育の実際に関して明らかにしてきた。敗戦前後を比較して、次のようなことが指摘できる。

行事に関しては、入園式、修了式、遠足、遊戯会・発表会、運動会は、戦前戦後とも共通して行われていた。遊戯会・発表会では、衣装を着けての遊戯が、戦前から行われていた。仏教の園では、花祭りが行われ、宗教的な行事は、戦前戦後とも大きな変化はなかつ

たと思われる。

保育内容に関しては、戦後は、歌や遊戯、紙芝居では、戦争に関連するものがとりあげられなくなる。紙芝居では「サルとカニ」「三匹の子豚」「チビ公物語」のように、戦後になっても引き続き読まれていたものもある。手技では戦前戦後とも折紙がよく行われていたが、戦前・戦時下にも戦争にかかわる題目はみられなかった。「カブト」「舟」「金魚」のように戦前戦後に共通してあげられていた題目もある。自由遊びでは、滑り台、ブランコ等、保育所にある園庭の遊具で遊ぶことが共通してあげられていた。

戦時下の保育に関しては、「日本の一大事の時を背負って雄々しく」とか「兵隊さんに負けないよう」というような思いが記録されている。また警報や空襲によって保育が中断され、落ち着いて保育が出来ない状況で、日々を過ごしていたところもあった。戦争末期になると、おやつをはじめとして物資不足になり、履物や服にもそれが表れていた。この状況は、敗戦後も続いていた。こうした中で、保育者は子どもたちのことを思いやり保育を進めていたが、そうした状況を引き起こした戦争自体への言及や敗戦をどのように受け止めたかに関する記述は、残念ながらもあたらなかった。

#### 付記

- ①執筆分担は、「はじめに」「2. 記念誌にみる保育」が清原みさ子、「1. 保育日誌等にみる保育」が寺部直子、「3. 写真にみる保育」が榊原菜々枝、「おわりに」が豊田和子・清原みさ子である。
- ②本稿は、日本教育学会第77回大会（宮城教育大学、2018年9月）において、寺部直子、清原みさ子、豊田和子の3名で、共同研究発表を行った内容をベースとしている。

本研究の資料収集に快くご協力くださった保育所関係者に謝意を表したい。

#### 註

- 1) 『八十年のあゆみ』、社会福祉法人めぐみ隣保会めぐみ保育園、2008、55頁。[長野県飯山市]
- 2) 社会福祉法人上田明照会『創立五十年史』、1970（再刊）、8頁。[長野県上田市]
- 3) 『春夏秋冬恩寵の風薫る一博愛社創立百年記念誌』、社会福祉法人博愛社、1990、49頁。[大阪府大阪市]
- 4) 五十嵐茂雄『フロジャック神父の生涯』、緑地社、1970（2版）、267頁、「創立者と徳田保育園」より。[東京都中野区]
- 5) 更井良夫編『社会福祉法人岡山博愛会100年史』社会福祉法人岡山博愛会、1991、134～137頁。[岡山県岡山市]
- 6) 『信愛保育園創立100周年記念誌』、信愛保育園、2016、17頁。[京都府京都市]
- 7) 『年輪一目でみる70年の歩み—』、社会福祉法人伏木保育園、1995、13頁。[富山県高岡市]
- 8) 社会福祉法人聖母園創立50周年史編集委員会編『聖母園 創立五十周年史』、社会福祉法人聖母園、1987、99頁。[山口県下関市]
- 9) 『60年のあゆみ』、社会福祉法人梅檀福祉会梅檀保育園、1984、20頁。[愛知県稲沢市]
- 10) 記念誌編集委員会編『慈愛〔園舎改築落成・創立50周年記念誌〕』、社会福祉法人久慈保育園、1989、



- 27頁。[岩手県久慈市]
- 11) 創立90周年記念誌編さん委員会編『小さな笑顔を見つめ続けて 瀬戸桜保育園創立90年』、社会福祉法人桜会瀬戸桜保育園、2013、52頁。[岡山県岡山市]
  - 12) 同上書、27頁。
  - 13) つばみ保育園創立70周年記念会実行委員会編『すずかけの樹きの下したで つばみ保育園創立70周年記念誌』、社会福祉法人つばみ会、2002、9頁。[東京都江戸川区]
  - 14) 川内隣保館保育園五十周年・創立七十周年記念事業『まこと ひかり いのち』、5頁。[鹿児島県薩摩川内市]
  - 15) 梅檀保育園、前掲書、22頁。
  - 16) 同上書、23頁。
  - 17) 若葉保育園70周年記念行事実行委員会、同記念誌編集委員会編『若葉保育園70周年記念誌』、保泉欣嗣、2006、30～31頁。[埼玉県行田市]
  - 18) 梅檀保育園、前掲書、24頁。
  - 19) 『南町保育園創立80周年記念誌』、南町保育園創立80周年記念誌編集委員会、2007、22頁。[福島県会津若松市]
  - 20) 川内隣保館保育園、前掲書、6頁。
  - 21) こがね保育園創立80周年実行委員会編・発行『こがね保育園 創立80周年記念誌』、2010、4頁。[熊本県球磨郡]
  - 22) 土山雅之・土山麗子編『道程みちのり—白道保育園60年のあゆみ—』、社会福祉法人護汝会白道保育園、1999、17～18頁。[静岡県三島市]
  - 23) めぐみ保育園、前掲書、39頁。
  - 24) 同上書、56頁。
  - 25) 久慈保育園、前掲書、32頁。
  - 26) 聖母園、前掲書、1987。
  - 27) 本田トヨ『私の七十五年』、社会福祉法人婦人生活文化協会・財団法人蘇峰会および『財団法人婦人文化協会の三十年史』による。頁無。[東京都目黒区]
  - 28) つばみ保育園、前掲書、10頁。
  - 29) 南町保育園、前掲書、22頁。
  - 30) 同上書、23頁。
  - 31) 梅檀保育園、前掲書、28頁。
  - 32) 同上書、29頁。
  - 33) 同上書、30頁。
  - 34) つばみ保育園、前掲書、11頁。
  - 35) 神戸保育園園長 古賀孝子編『八十年を顧みて』、神戸保育園、1986、112頁。[兵庫県神戸市]
  - 36) 久慈保育園、前掲書、32頁。